

『史記』の歴史観と叙述

藤田 勝久

はじめに

- 一 父・談と司馬遷の歴史観
 - 二 古代本紀と表の歴史観
 - 三 春秋戦国世家の歴史観
- おわりに

はじめに

『史記』は中国古代史の基本史料であり、その特徴は紀伝体という歴史書のスタイルや、通史という叙述の形式にあるといわれる。紀伝体とは、『春秋左氏伝』のような編年体の歴史書に対して、『史記』に始まる本紀と世家・列伝などの部門を総合する歴史叙述であり、むしろ世家をばぶいた『漢書』のほうが典型的な紀伝体のスタイルとなる。¹⁾ また通史とは、伝説の黄帝から漢武帝の同時代までを対象としたことによる。

これまで私は、『史記』の構造を分析する方法として、出土資料と文献から漢代の文書や書籍の形式を復元し、それらの先行資料をどのように取捨選択し編集したかという手法を探ることによって、司馬遷の編集意図と『史記』の性格を明らかにしようとした。^②しかし『史記』をみると、そのなかに複数の歴史観がうかがえ、それは叙述の開始と最終の年代（上限と下限の断限）にも関連している。^③

たとえば『史記』太史公自序にみえる列伝第七十の説明では、二つの歴史観が記されている。

1 於是卒述陶唐以來。至于麟止。自黃帝始。

2 太史公曰。余述歷黃帝以來至太初而訖。百三十篇。

ここでは一方で「陶唐（堯）から獲麟まで」といい、もう一方で「黃帝から太初年間」という『史記』執筆の範囲を示している。このほか『史記』は、表や世家に異なる歴史観を記している。このような著述の範囲は、とくに下限の問題を中心に考察されているが、まだ複数の歴史観について十分には説明されていない。そこで『史記』の構造を考えると、複数の歴史観が示す意味と、その社会的背景を検討する必要がある。

本稿では、司馬談と司馬遷の歴史観を手がかりとして、『史記』にみえる叙述について考えてみたい。また『史記』本紀と表、世家の構造をつうじて、その特徴の一端を明らかにしたいとおもう。

一 父・談と司馬遷の歴史観

最初に問題となるのは、司馬談の歴史観である。すでに別稿では、^④第一の執筆動機となる父の遺言について検討したが、ここでは司馬氏の家系がかって天官や太史を司るという伝えが分析の中心であった。ここでは司馬談が、歴史

の始まりと終わりをどのようにとらえていたかという点から、父の歴史観を考えてみよう。

『史記』太史公自序には、つぎのように述べている。

余先周室之太史也。自上世嘗顯功名於虞夏。典天官事。後世中衰。絶於予乎。汝復爲太史。則續吾祖矣。今天子接千歲之統。封泰山。而余不得從行。是命也夫。命也夫。余死。汝必爲太史。爲太史。無忘吾所欲論著矣。……夫天下稱誦周公。言其能論歌文武之德。宣周邵之風。達太王王季之思慮。爰及公劉。以尊后稷也。幽厲之後。王道缺。禮樂衰。孔子脩舊起廢。論詩書。作春秋。則學者至今則之。自獲麟以來四百有餘歲。而諸侯相兼。史記放絶。今漢興。海內一統。名主・賢君・忠臣・死義之士。余爲太史而弗論載。廢天下之史文。余甚懼焉。汝其念哉。ここで司馬談が述べている歴史の始まりは、まず虞舜と夏王朝（禹が始祖）の時代から司馬氏は天官のことを司り、周王室の太史となったが、やがて衰えたという。これは自序の冒頭にみえる先祖の記述とほとんど同じである。ただし冒頭では、黄帝につぐ五帝の一人である顓頊の時代から重と黎に天地を司らせ、唐堯と虞舜の時代にその子孫が役目を担ったと追加している。

昔在顓頊。命南正重以司天。北正黎以司地。唐虞之際。紹重黎之後。使復典之。至于夏商。故重黎氏世序天地。其在周。程伯休甫其後也。當周宣王時。失其守而爲司馬氏。司馬氏世典周史。

また自序の列伝第七十の説明でも、唐堯・虞舜と周の時代に、司馬氏は代々「天官」を司ったと位置づけている。したがって太史公自序で、もっとも古い時代は顓頊と堯・舜の時代であるが、父の認識では舜の時代が最古であった。つぎに父は、歴史の変化をつぎのように述べている。漢の武帝が元封元年（前一一〇）に泰山で封禪を挙行しようとするのは、周から一〇〇〇年の統業を継ぐものである。そして代々「天官」を司る家系でありながら参加できないため、息子に太史となって著述を書き続けるように委託した。その周から漢までの歴史には、いくつかの盛衰がある

とする。

まず周の礼楽などが整うのは、周武王が殷を滅ぼし、つぎの成王の時代に周公旦が補佐したときである。その徳を評価するなかで、周の始祖である后稷を尊んだと述べている。周本紀では、この后稷の母・姜原を帝嚳の元妃と伝えている。帝嚳は、黄帝と顓頊につづく五帝にあげられ、ここでは周の始祖によって間接的に最古の時代を帝嚳まで遡らせたことになる。しかし黄帝への言及はない。

そのあと周は、厲王と幽王のときに衰退と混乱が生じて、王道が欠け、礼楽が衰えた。これは厲王の出走と、共和時代、宣王の即位をへて、幽王が犬戎に殺される事件を指している。ここから平王が雒邑（洛陽）に遷都して、春秋・戦国時代をむかえる。この春秋時代の末に孔子が現れて、周の礼儀制度の復興を試みた。それは「詩・書」を論じ「春秋」を作ると言うように、「六芸」の編纂と礼儀の復興であり、その時代を『春秋』の最後にみえる「獲麟」（麟を獲える）の記載で代表させている。これは十二諸侯年表では前四八一年のことである。

ところが孔子の復興にもかかわらず、戦国時代になると諸侯国が互いに兼併を争い、「史の記」が失われたという。これは列伝第七十の説明にみえるように、秦の焚書がふくまれている。その年代が約四〇〇年つづき、のちに武帝期の司馬父子に受け継がれる。

このような歴史観は、ふたたび司馬遷が述べている。

太史公曰。先人有言。自周公卒五百歲而有孔子。孔子卒後至於今五百歲。有能紹明世。正易傳。繼春秋。本詩書禮樂之際。意在斯乎。意在斯乎。

この先人とは父を指すといわれ、遺言とあわせてつぎのように示すことができる。

周公旦の死……厲王・幽王の混乱……孔子まで

(約五〇〇年)

孔子の死……戦国の混乱、秦代の焚書……漢武帝まで

(約五〇〇年)

このように司馬談の歴史観をみると、もともと古くは舜の時代であり、直接的には周王朝から漢代に接続させている。また周の始祖を述べるなかで、帝嚳の元妃から生まれた后稷の評価を記している。そして周公旦から孔子までが五〇〇年、孔子の卒から自分たち父子までが五〇〇年という天変に対応する認識を示している。

このような歴史観とはば共通するのが、『史記』封禪書の始まりである。ここには古の天命をうけた帝王が封禪を重んじたことを述べ、『尚書』を引いて帝舜から始めている。

自古受命帝王。曷嘗不封禪。蓋有無其應而用事者矣。未有睹符瑞見而不臻乎泰山者也。雖受命而功不至。至梁父矣而德不洽。洽矣而日有不暇給。是以即事用希。傳曰。三年不爲禮、禮必廢。三年不爲樂、樂必壞。每世之隆。則封禪答焉。及衰而息。厥曠遠者千有餘載。近者數百載。故其儀闕然堙滅。其詳不可得而記聞云。

尚書曰。舜在璇璣玉衡。以齊七政。遂類于上帝。禋于六宗。望山川。徧羣神。輯五瑞。擇吉日。見四岳諸牧。還瑞。歲二月。東巡狩。至于岱宗。岱宗。泰山也。柴望秩于山川。遂覲東后。東后者。諸侯也。合時月。正日。同律度量衡。修五禮。五玉三帛二生一死贄。五月。巡狩至南岳。南岳。衡山也。八月。巡狩至西岳。西岳。華山也。十一月。巡狩至北岳。北岳。恒山也。皆如岱宗之禮。中岳。高高也。五載一巡狩。禹遵之。

ここで舜は、一年のうち二月に東巡して泰山を祭り、五月に南巡して衡山、八月に西巡して華山、十一月に北巡して恒山を祭り、中岳の高山を祭ることになっている。これらは五年ごとに巡狩し、夏王朝の始祖となる禹もこれを遵守したと伝える。この封禪書の始まりは、封禪を重視する司馬談の歴史観と共通している。

したがって封禪書の記述をみると、舜が封禪を始め、それを漢武帝が受け継ぐという構成になっていることがわかる。ただし封禪書は、武帝の第一回の封禪のあとも記載がつづくが、その封禪の思想に舜から漢武帝へという年代認

識があることは明らかであろう。⁽⁸⁾これを司馬談が、封禪に参加できず憤死しようとした背景とあわせてみると、かれが武帝の封禪を時代の画期としていたことがよく理解できよう。これが一つの歴史観である。

これに対して司馬遷の歴史観は、どのようなものであろうか。いま『史記』にみえる最終的な著述範囲を司馬遷の思想とすれば、太史公自序の冒頭では舜より早い堯の時代から始まりを記していた。しかしさらに父の歴史観と違うのは、列伝第七十の著述範囲の説明である。ここでは一方で「陶唐（堯）以来から麟止に至る」としながら、別に「黄帝より始める」といい、最後の部分には「黄帝より以来、太初に至っておわる」と述べている。

また本紀の編集意図を述べた部分でも、上は軒轅（黄帝）から下はここ（武帝）に至ると述べている。

罔羅天下放失舊聞。王迹所興。原始察終。見盛觀衰。論考之行事。略推三代。錄秦漢。上記軒轅。下至于茲。著十二本紀。既科條之矣。

これらは司馬談が封禪の由来を述べて、舜から漢武帝までを時代の画期とし、あるいは「堯から麟止に至る」とするのに対して、始まりを黄帝まで遡らせ、終わりを「太初年間」まで延長したものであろう。それでは黄帝まで遡らせたのは、どのような社会背景があるのだろうか。

まず想定できることは、漢代に黄帝を重んじる風潮の影響である。たとえば封禪書には、汾陰で后土（土地神）を祭り宝鼎を得たあと、月の朔旦が冬至にあたるのは黄帝のとくと同じと進言する者や、ただ黄帝だけが泰山に登って封禪をしたと言う者が現れたと述べている。⁽⁹⁾また武帝は黄帝が昇天した話を聞いて、「私が黄帝のようになれば、妻子を去ることは藁ぐつを脱ぐようなものだ」と言ったエピソードが残っている。⁽¹⁰⁾さらに封禪書では、武帝が第一回の封禪に先だって黄帝の墓を祭っている。

其來年冬。上議曰。古者先振兵澤旅。然後封禪。乃遂北巡朔方。勒兵十餘萬。還祭黃帝冢橋山。釋兵須如。上曰。

吾聞黃帝不死。今有家何也。或對曰。黃帝已僊上天。群臣葬其衣冠。既至甘泉。爲且用事泰山。先類祠太一。

このほか『史記』五帝本紀の論贊では、『尚書』にみえる堯より以前に、雅訓ではないとしても百家の語に黃帝のことを記し、「五帝德」「帝繫姓」などにみえるという。また司馬遷自身の旅行の印象として、黃帝と堯・舜ゆかりの地に風教の違いを感じたと述べている。

太史公曰。學者多稱五帝。尚矣。然尚書獨載堯以來。而百家言黃帝。其文不雅馴。薦紳先生難言之。孔子所傳宰予問・五帝德及帝繫姓。儒者或不傳。余嘗西至空桐。北過涿鹿。東漸於海。南浮江淮矣。至長老皆各往往稱黃帝・堯・舜之處。風教固殊焉。總之不離古文者近是。予觀春秋・國語。其發明五帝德・帝繫姓章矣。顧弟弗深考。其所表見皆不虛。書缺有闕矣。其軼乃時時見於他說。非好學深思。心知其意。固難爲淺見寡聞道也。余并論次。擇其言尤雅者。故著爲本紀書首。

これらは黃帝を諸國の始祖とみなし、伝説の由来に根拠を求める風潮を示している。

つぎに『史記』五帝本紀の末尾には、黃帝から舜、禹はみな同姓で國号が異なるだけと述べ、黃帝を諸國の始祖と位置づけている^①。これは三代世表の開始と同じである。

しかし黃帝を始まりとするのは、さらに天命の起点と終点、あるいは諸制度の起源を規定する歴史観とも関連するとおもわれる。それは曆書の記述に対応している。

『史記』曆書の冒頭には、王者が天命を受けるとき、かならず初めをつつしみ、曆を正して服色をかえ、天元（天の運行）を推しはかることを述べている。そのあと太史公の論贊では、最初に星曆を定めたのは黃帝であり、顓頊、堯、舜や夏・殷・周の時代をへて、漢の武帝のとき詔して、黃帝にならって曆数を定める記述で終えている。これは曆数の始まりを黃帝とし、武帝の太初元年の改曆で復興すると位置づけたことになる。

太史公曰。神農以前尚矣。蓋黃帝考定星歷。建立五行。起消息。正閏餘。於是有天地神祇物類之官。是謂五官。各司其序。不相亂也。民是以能有信。神是以能有明德。民神異業。敬而不瀆。故神降之嘉生。民以物享。災禍不生。所求不匱。……

至今上即位。招致方士唐都。分其天部。而巴落下閩運算轉歷。然後日辰之度。與夏正同。乃改元。更官號。封泰山。因詔御史曰。乃者有司言星度之未定也。廣延宣問。以理星度。未能詹也。蓋聞昔者黃帝合而不死。名察度驗。定清濁。起五部。建氣物分數。然蓋尚矣。書缺樂弛。朕甚閔焉。朕唯未能循明也。紬績日分。率應水德之勝。今日順夏至。黃鐘爲宮。林鐘爲徵。太簇爲商。南呂爲羽。姑洗爲角。自是以後。氣復正。羽聲復清。名復正變。以至子日當冬至。則陰陽離合之道行焉。十一月甲子朔旦冬至已詹。其更以七年爲太初元年。

したがって司馬遷が、父とは違って黃帝に始まり武帝の太初改曆に終わるといふ歴史觀をもつようになったのは、黃帝を称える当時の風潮による影響かもしれないが、なによりも星曆や、制度改革の終始を重んじたからではなからうか。これは封禪のとき亡くなった父にはみられない発想であり、司馬遷のように太初改曆に従事して、はじめて時代の画期とする思想が生まれてくるはずである。

このように『史記』にみえる二つの歴史觀は、同じ太史令でありながら父と司馬遷の立場から、封禪を時代の画期とみるか、あるいは太初改曆を画期とみるかという社会情勢が影響していたのではないかとおもわれる。

二 古代本紀と表の歴史觀

これまで『史記』には二つの歴史觀がみられ、それを父と司馬遷の立場による違いではないかと推測した。しかし

『史記』の構成をみると、司馬遷の歴史観が必ずしも反映された叙述とはなっていない。この点を、『史記』本紀と表を中心に分析してみよう。

『史記』本紀の十二篇は、天命による王者を述べた部門である。

卷一、五帝本紀（黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜）

卷二夏本紀（禹が始祖）

卷三殷本紀（帝嚳の次妃・簡狄を母とする契が始祖）

卷四周本紀（帝嚳の元妃・姜原を母とする后稷が始祖）

卷五秦本紀（顓頊の子孫、女脩を母とする大業が始祖）

卷六秦始皇本紀

卷七項羽本紀、卷八高祖本紀、卷九呂后本紀

卷一〇孝文本紀、卷一一孝景本紀、卷一二孝武（今上）本紀

これはほぼ古代の通史となっており、歴史の変遷を知ることができる。このうち五帝本紀の堯、舜より以降と夏、殷、周本紀の歴史は、天命によって移動するという觀念がみられ、その編集意図を自序では「天下の放失せる旧聞を罔羅し、王跡の興る所、始めを原ね終りを察し、盛んなるを見て衰えるを觀て、之が行事を論考す。略ぼ三代を推し、秦漢を録す。上は軒轅を記し、下は茲に至る。十二本紀を著し、既に之を科條せり」と述べている。しかしここで問題とするのは、その歴史観と叙述との関係である。

『史記』五帝本紀は、黄帝に始まり、司馬遷はその来源を百家の雜語や「五帝徳」「帝繫姓」などと述べていた。それはまた『史記』卷一三、三代世表の論贊でも、ほぼ同じ記述をしている。

太史公曰。……余讀諜記。黃帝以來皆有年數。稽其歷譜諜終始五德之傳。古文咸不同乖異。夫子之弗論次其年月。豈虛哉。於是以五帝繫諜・尚書集世。紀黃帝以來訖共和。爲世表。

ここでは黃帝より以前の年数を記す資料も存在したが、その年月が異なるので司馬遷は採用せず、「五帝繫諜」「尚書集世」によって世表だけとした。索隱の注によれば、『大戴禮』に「五帝德」「帝繫」篇があり、司馬遷はこの二篇の諜と『尚書』の記述を取って、黃帝より以前の世表を作ったとみなしている⁽¹⁸⁾。

たしかに『大戴禮』五帝德篇には、宰予の問いに対する「孔子曰」の部分に五帝本紀の黃帝と帝顓頊、帝嚳の叙述と同じ文章がみられ、『史記』のほうが黃帝の記述に若干の追加をしている⁽¹⁹⁾。また『大戴禮』帝繫篇では、「黃帝居軒轅之丘。娶于西陵氏之子。謂嫫之祖氏」などの記事が五帝本紀と共通し、黃帝以下の系譜は三代世表とも共通している⁽²⁰⁾。

こうしてみると、五帝本紀の黃帝と顓頊、帝嚳の記述は『大戴禮』五帝德、帝繫篇と共通する資料をもとにして、そこに若干の記述を加えたことがわかる。それでは黃帝の叙述は、『史記』全体のなかで、どのような位置を占めているのだろうか。

すでにみたように黃帝は曆の制定などの創始者であり、その後の系譜のルーツであった。こうした位置づけは、三代世表と『史記』曆書に共通しているが、そのほか律書と天官書にも通じている⁽²¹⁾。しかし歴史の叙述としてみれば、黃帝の位置づけは、必ずしも後の歴史に接続していない。

五帝本紀では、神農氏の世に諸侯が互いに争ったが、それを軒轅が徳を修めて征伐し、そのため諸侯が推戴して神農氏にかわって黃帝にしたと述べる。その一つが、阪泉の野で炎帝と戦い、また涿鹿の野で蚩尤と戦ったことである。そして天下の順わない者を征伐し、東は丸山と泰山に登り、西は空桐に至って鷓頭山に登り、南は長江に至って熊山、

湘山に登り、北は葷粥の異民族を追って、釜山で諸侯と符を合わせたという。そのあと黄帝は、涿鹿の野に居住して万国をなびかせ、亡くなった後は橋山に葬られた。¹⁷⁾

ところがその後は、「其孫昌意之子高陽立。是爲帝顓頊也。帝顓頊高陽者。黃帝之孫而昌意之子也。……」と述べ、また「帝顓頊生子曰窮蟬。顓頊崩。而玄囂之孫高辛立。是爲帝嚳。帝嚳高辛者。黃帝之曾孫也。……」とあるように、系譜の接続を記すだけで、その記載も『大戴礼』五帝徳篇とほぼ共通していた。これは天命による王者の移動というよりは、むしろ黄帝に始まる徳の継承について、顓頊と帝嚳までの系譜を述べたにすぎない。そして具体的に王者の事績が叙述されるのは、堯より以降、舜、そして夏王朝を始めた禹の叙述である。これらの叙述は先人が指摘するように、「書経」堯典や舜典、禹貢などをはじめ、他の文献と共通する部分がある。¹⁸⁾

こうした天命の移動という觀念は、『史記』夏本紀と殷本紀の叙述や論贊によく示されている。すなわち夏本紀の末には、暴君としての桀王に殷の湯王が代わることを示す。

帝桀之時。自孔甲以來而諸侯多畔。夏桀不務徳而武傷百姓。百姓弗堪。酒召湯而囚之夏臺。已而釋之。湯修徳。諸侯皆歸湯。湯遂率兵以伐夏桀。桀走鳴條。遂放而死。桀謂人曰。吾悔不遂殺湯於夏臺。使至此。湯乃踐天子位。代夏朝天下。湯封夏之後。至周封於杞也。

また論贊には、禹の氏族と、禹の終焉の地（会稽）を記している。

太史公曰。禹爲姒姓。其後分封。用國爲姓。故有夏后氏・有扈氏・有男氏・斟尋氏・彤城氏・褒氏・費氏・杞氏・繪氏・辛氏・冥氏・斟氏・戈氏。孔子正夏時。學者多傳夏小正云。自虞・夏時。貢賦備矣。或言禹會諸侯江南。計功而崩。因葬焉。命曰會稽。會稽者。會計也。

『史記』殷本紀の末では、ふたたび暴君としての紂王が、周武王に代わることになっている。

紂愈淫亂不止。微子數諫不聽。乃與大師・少師謀。遂去。比干曰。爲人臣者。不得不以死爭。酒強諫紂。紂怒曰。吾聞聖人心有七竅。剖比干觀其心。箕子懼。乃詳狂爲奴。紂又囚之。殷之大師・少師乃持其祭樂器奔周。周武王於是遂率諸侯伐紂。紂亦發兵距之牧野。甲子曰。紂兵敗。紂走入登鹿臺。衣其寶玉衣。赴火而死。周武王遂斬紂頭。縣之白旗。殺妲己。釋箕子之囚。封比干之墓。表商容之閭。封紂子武庚・祿父。以續殷祀。令修行盤庚之政。殷民大說。於是周武王爲天子。其後世貶帝號。號爲王。而封殷後爲諸侯。屬周。

またその論贊には、契から成湯以来のことを『書』『詩』から採ったと述べている。

太史公曰。余以頌次契之事。自成湯以來。采於書詩。契爲子姓。其後分封。以國爲姓。有殷氏・來氏・宋氏・空桐氏・稚氏・北股氏・目夷氏。孔子曰。殷路車爲善。而色尚白。

したがって『史記』五帝本紀では、黄帝を始祖と位置づけているが、その歴史叙述からみれば顓頊、帝嚳までは系譜を示すだけで直接的に天命の移動を記しておらず、それは堯から舜に至ってはじめて接続し、夏本紀と殷本紀につづくことになる。この意味で『史記』では、通史としての起点を黄帝に置いているが、その天命の移動と盛衰を探る歴史叙述の中心は、父が述べたように堯と舜より以下にあるという見方もできよう。

それでは『史記』本紀と表の歴史観とは、どのような関係になるのだろうか。十表の構成は、つぎの通りである。

- 卷一三、三代世表（五帝から夏、殷、周の厲王、共和時代まで）
- 卷一四、十二諸侯年表（周の共和から、孔子の死、周の敬王まで）
- 卷一五、六国年表（周の元王元年から秦始皇帝、二世皇帝三年まで）
- 卷一六、秦楚之際月表（秦二世元年から項羽の死、漢五年まで）
- 卷一七、漢興以来諸侯王年表（以下は漢代の諸表）

卷一八、高祖功臣侯者年表、卷一九惠景間侯者年表

卷二〇、建元以來侯者年表、卷二一建元已來王子侯者年表

卷二二、漢興以來將相名臣年表

ここでとくに問題となるのは、『史記』本紀と三代世表（以下、世表）、十二諸侯年表（以下、諸侯年表）との関係である。なぜなら二つの表には、中国で最初の紀年となる「共和」が記され、本紀とは異なる時代区分となっているからである。

これについて伊藤徳男氏は、『史記』十表の構成を分析してつぎのように説明されている。²⁰ すなわち『史記』本紀は王朝交替の歴史を述べるのに対して、三代世表と十二諸侯年表、六国年表は、王朝や歴史上の大事件を区分とするものではなく、封建制度の視点から中国民族の歴史を示したものである。たとえば三代世表は、封建制度の衰退を示す周厲王の出走で終っており、十二諸侯年表が最後に孔子の死までを記すのは、封建制度の再建が絶望になったことを表している。また六国年表は、秦帝国の郡県制度の施行までを記して、封建制度の消滅を表すという。したがって司馬遷は、『史記』五帝本紀から秦始皇本紀まで「五帝三王」の通説に従いながら、むしろ表一、二、三の部門で自己の封建を重んじる歴史観を残したものとす。

それでは『史記』本紀の歴史観と、三代世表、十二諸侯年表の区分は、なぜ異なるのであろうか。いま『史記』三代世表の前半と後半を一覧し、また先行資料との関係を考えれば、そこに別の見方ができるのではないかとおもう。それは十表では、本紀にみた歴史観よりも、司馬遷が入手し判断した素材のあり方に制約されたのではないかということである。司馬遷は、みずから論贊で、年代を記した資料を捨てて「五帝徳」「帝繫姓」や『尚書』から「共和」までの三代世表を作ったと述べるように、かれは年代の開始を「共和元年」とする資料にもとづいたことになる。こ

表1 三代世表（前半）の構成

帝王世国号	顓頊属	佶属	堯属	舜属	夏属	殷属	周属
黄帝号有熊。	黄帝生昌意。	黄帝生玄囂。	黄帝生玄囂。	黄帝生昌意。	黄帝生昌意。	黄帝生玄囂。	黄帝生玄囂。
帝顓頊黄帝孫。起黄帝至顓頊三世。	昌意生顓頊。為高陽氏。	玄囂生嬌極。	玄囂生嬌極。	昌意生顓頊。	昌意生顓頊。	玄囂生嬌極。	玄囂生嬌極。
帝佶黄帝曾孫。起黄帝至帝佶四世。号高辛。		嬌極生高辛。為帝佶。	嬌極生高辛。高辛生放勳。	窮蟬生敬康。敬康生句望。		高辛生禹。	玄囂生嬌極。嬌極生高辛。
帝堯。起黄帝至佶子五世。号唐。			放勳為堯。	句望生嬌牛。嬌牛生瞽叟。		禹為殷祖。	高辛生后稷為周祖。
帝舜。黄帝玄孫之玄孫。号虞。				瞽叟生重華。是為帝舜。		禹生昭明。	后稷生不窋。
帝禹。黄帝耳孫。号夏。					顓頊生絳。絳生文命。文命為禹。	昭明生相土。	不窋生鞠。
帝啓。伐有扈。作甘誓。						相土生相若。	鞠生公劉。
帝太康。						相若生曹圉。	公劉生慶節。
帝仲康。太康弟。						曹圉生冥。	慶節生皇僕。皇僕生差弗。
帝相。						冥生振。	差弗生毀淪。毀淪生公非。
帝少康。						振生微。微生報丁。	公非生高圉。高圉生垂圉。
帝予。						報丁生報乙。報乙生報丙。	垂圉生公祖類。
帝槐。						報丙生主壬。主壬生主癸。主癸生天乙。是為殷湯。	公祖類生太王。太王父。賣父生季歷。季歷生文王昌。益易卦。文王昌生武王發。
帝泄。 *.....							
帝履癸。是為桀。從禹至桀十七世。從黃帝至桀二十世。◎.....							

* 帝泄 | 帝不降 | 帝局。 不降弟。 | 帝廩 | 帝孔甲。 不降子。 好鬼神。 淫乱不好德。 二龍去。 | 帝皋 | 帝癸 | 帝履癸。 是為桀。
 ◎ 桀より以降は、第一段に殷王朝の「殷湯代夏氏。 從黃帝至湯十七世。」から「帝辛。 是為紂。 弑。 從湯至紂二十九世。 從黃帝至紂四十六世。」までの系譜が記されている。

表2 三代世表（後半）の構成

周	魯	齊	晉	秦	楚	宋	衛	陳	蔡	曹	燕
* 成王誦	魯周公旦。 武王弟。	齊太公尚。 文王武王師。	晉唐叔 虞。武王 子。	秦惠來。 助紂。父 飛廉有力。	楚熊繹。 繹父鬻熊	宋微子 啓。紂 庶兄。	衛康叔。 武王弟。	陳胡公 滿。舜 之後。	蔡叔度。 武王弟。	曹叔振 鐸。武 爽。周 同姓。	燕召公
康王釗刑錯四十余年。	魯公伯禽。	丁公呂伋。	晉公燮。	女防。	熊義。	啓弟。	康伯。	申公。	蔡仲。	初封 王弟。	初封
昭王瑕。南巡不返。不赴。諱之。	考公。	乙公。	武侯。	旁皋。	熊黶。	宋公。	孝伯。	相公。	蔡伯。	太伯。	九世至 惠侯。
穆王滿。作甫刑。荒服不至。	弟。場公。考公	癸公。	成侯。	大几。	熊勝。	丁公。	嗣伯。	孝公。	宮侯。	仲君。	
恭王伊扈。	幽公。	哀公。	厲侯。	大駱。	熊煬。	丁公弟。	韋伯。	慎公。	厲侯。	宮伯。	
懿王堅。周道衰。詩人作刺。	魏公。	胡公。	靖侯。	非子。	熊渠。	湯公。	靖伯。	幽公。	武侯。	孝伯。	
孝王方。懿王弟。	厲公。	獻公弑胡公。		秦侯。	熊無康。	厲公。	貞伯。	釐公。		夷伯。	
夷王變。懿王子。	獻公厲公弟。	武公。		公伯。	熊鷺紅。	釐公。	頃侯。				
周厲王胡。以惡聞。過亂。出奔遂死于彘。	真公。			秦仲。	弟。熊延。紅		釐侯。				
共和。二伯行政。	弟。武公。真公				熊勇。						

* 周成王誦の前項には、第一段に「周武王代殷。 從黃帝至武王十九世。」という記載がある。

表3 十二諸侯年表の構成(冒頭の部分)

共和元年。厲王子居召公宮。是為宣王。王少大臣共共和行政。	真公溥十五年。	武公寿十年。	靖侯宣白十八年。	秦仲四年。	熊勇七年。	釐公十年。	釐侯十年。	幽公靈十三年。	武侯二十三年。	夷伯四年。	惠侯四年。	燕
二	十八	十一	十八	五	八	十九	十五	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八
三	十七	十一	二	六	九	二十	十六	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九

表4 十二諸侯年表の構成(最終の部分)

周	魯	齊	晉	秦	楚	宋	衛	陳	蔡	曹	鄭	燕	吳
(敬王) 三十八	(哀公)十三 與宣公黃池。	(簡公)三	(定公)三十 與與會黃池。爭長。	(悼公)九	(惠王)七 伐陳。	(景公)三 十五。鄭	(出公)十一	(湣公)二十	(成公)九	(宣公)十九	(肅公)十一	(宣公)十一	(夫差)十 四。與晉
三十九	十四。西狩獲麟。衛出公來奔。	四。田常殺簡公。立其弟懿。	三十一	十	八	三十六	十二。父蒯聵入。輒出	二十一	十	二十	十二	十五	會黃池。
四十	十五。子服景伯使齊。子賈為介。齊悼我侵地。	齊平公懿元年。景公孫也。齊自是稱田氏。	三十二	十一	九	三十七。發惑守心。子韋曰壽元。	二十一	十一	二十	二十一	二十二	二十三	二十四
四十一	十六。孔子卒。	二	三十三	十二	十。白公勝殺令尹子西。攻惠王。葉公攻白公。白公自殺。惠王復國。	三十八	二	二十二	十一	十二	十三	十四	十五
四十二	十七	三	三十四	十三	十一	三十九	三。莊公辱戎州人。戎州人與趙簡子攻莊公。出奔。	十三	十三	十四	十五	十六	十七
四十三。敬王崩。	十八。二十七卒。	四。二十。五卒。	三十五。三十七卒。	十四卒。子厲公立。	十二。五十七卒。	四十。六十四卒。	衛君起元年。石博逐起出。輒復入。	十四。十九卒。	二十四。卒。	三十四。卒。	三十八。卒。	三十六。卒。	十九。二十三卒。

れが現代中国においても、古代紀年を考察する出発点となっている。²¹これは先にみた父と司馬遷が、周公旦を転換期とする歴史観とは異なっている。

そのとき三代世表の後半と、十二諸侯年表の構成をくらべてみると、すでに世表の後半では、諸侯年表が項目として「周、魯、齊、晋、秦、楚、宋、衛、陳、蔡、曹、燕」の順になっており、それに「鄭」「呉」の国を追加したことがわかる。そして諸侯年表の序文では、周厲王より以前からの記述がある「春秋曆譜」を読んだと記し、孔子が魯の隱公から下は「獲麟」に終わる『春秋』を編纂したことを評価している。したがって諸侯年表では、魯国を中心とする紀年資料を第一として、各国別に配列したことが推測される。ただし諸侯年表では、その終わりを『春秋』の「獲麟」ではなく、もう少し後の「孔子の死」を基準としている。

以上のことから、『史記』本紀の年代と、三代世表、十二諸侯年表の区分は明らかに異なっており、それは歴史観の相違というよりは、表のほうが直接的な系譜・紀年資料を利用したことを示すためではないかと推測される。そして父や司馬遷の歴史観が反映しているのは、むしろ本紀と八書の部門であり、しかも黄帝の歴史評価をのぞけば、叙述の主体は父がいう堯・舜と禹（夏王朝）より以来の歴史にあるといえよう。

三 春秋戦国世家の歴史観

『史記』五帝本紀では、黄帝を歴史の始まりと位置づけていたが、三代世表の冒頭や、八書の一部にみえる評価をのぞけば叙述の主體的な部分とはなっていない。それはまた『史記』世家の始まりも同じような傾向を示している。いま戦国時代までの世家を示せば、以下のような始祖から記している。

- 卷二一 呉太伯世家（呉太伯は周の古公亶父の子、季歴の兄）
- 卷二二 齊太公世家（太公望・呂尚は周の文王・武王が師事した人物）
- 卷二三 魯周公世家（周公旦は周武王の弟）
- 卷三四 燕召公世家（召公奭は周と同姓で、周武王に封ぜられる）
- 卷三五 管蔡世家（管叔鮮と蔡叔度は周文王の子、武王の弟）
（曹叔鐸は周武王の弟）
- 卷三六 陳杞世家（陳胡公は帝舜の後裔、周武王に封ぜられ、帝舜の祀を奉ず）
（杞東楼公は禹の後裔、周武王に封ぜられ、夏后氏の祀を奉ず）
- 卷三七 衛康叔世家（衛康叔は周武王の同母の弟）
- 卷三八 宋微子世家（微子開は帝紂王の庶兄、周武王に封ぜられる）
- 卷三九 晋世家（唐叔虞は周武王の子、成王の弟）
- 卷四〇 楚世家（楚の先祖は顓頊。周文王の時、季連の子孫が鬻熊）
- 卷四一 越王句踐世家（先祖は禹の苗裔。二十余世が允常、子が句踐）
- 卷四二 鄭世家（桓公友は周厲王の少子、宣王の庶弟）
- 卷四三 趙世家（趙氏の先祖は、秦と祖を共にする）
- 卷四四 魏世家（畢公高の後裔、周と同姓）
- 卷四五 韓世家（先祖は周と同姓）
- 卷四六 田敬仲完世家（先祖は陳厲公の子、陳完）

これらの歴史では、諸国の始祖の伝えをのぞいて、主体となる歴史叙述は、おおむね周王室の人物か、周から封建された順序となっている。たとえば卷三六陳杞世家や卷四一越王句踐世家などでは、舜や禹の後裔と伝えており、例外として楚の先祖が顓頊と伝えている。そのほかは卷三一呉太伯世家のように周の出自か、あるいは周王から封建された人物に始まっている。また伝説の時代から始まる世家でも、実際の叙述が詳しくなるのは周王室のときからである。そこで『史記』世家では、叙述の主体が周本紀の時代より以降にあるとみなせよう。したがって実際に紀伝体となるのは周王朝からである。

『史記』世家の構成は、呉太伯世家から田敬仲完世家まで、おおむね先祖の功績によって建国し、ある時期に隆盛となるが、のちに不徳の君主が現れて衰退するという位置づけがなされている。これは本紀に対する世家の立場を表しているが、それは天命決定論ではなく、君主の徳と事績に注意するものである。

それでは、こうした大きな天変に対して、『史記』世家に共通してみられる時代の変化、あるいは歴史観はどのようなものだろうか。その手がかりは、西周と春秋時代の大事にみえるところであろう。

『史記』の春秋戦国世家をみて気づくことは、その叙述に他国の事件が多く記されていることである。たとえば卷三三齊太公世家には、以下のような事件が記されている（太字の部分）。

武公九年。周厲王出奔。居彘。十年。王室亂。大臣行政。號曰共和。二十四年。周宣王初立。二十六年。武公卒。子厲公無忌立。……莊公二十四年。犬戎殺幽王。周東徙雒。秦始皇列爲諸侯。……

（景公）四十八年。與魯定公好會夾谷。犁鉏曰。孔丘知禮而怯。請令萊人爲樂。因執魯君。可得志。景公害孔丘相魯。懼其霸。故從犁鉏之計。方會。進萊樂。孔子歷階上。使有司執萊人斬之。以禮讓景公。景公慙。乃歸魯侵地以謝。而罷去。是歲。晏嬰卒。

ここでは周の厲王が出奔した事件や、共和時代、周の幽王が犬戎に殺されたこと、周の東遷などを記しており、これは齊国にとっても大事件とみなすことができる。しかし春秋時代に秦が諸侯に封じられたことや、孔子が魯国で宰相となったことは、直接的に齊国に関連する事件ではない。

また卷三三魯周公世家でも、同じように他国の叙述がある。

真公十四年。周厲王無道。出奔虢。共和行政。二十九年。周宣王即位。……孝公二十五年。諸侯畔周。犬戎殺幽王。秦始列爲諸侯。……(定公)十年。定公與齊景公會於夾谷。孔子行相事。齊欲襲魯君。孔子以禮歷階。誅齊淫樂。齊侯懼。乃止。歸魯侵地而謝過。十二年。使仲由毀三桓城。收其甲兵。孟氏不肯墮城。伐之。不克而止。季桓子受齊女樂。孔子去。十五年。定公卒。子將立。是爲哀公。哀公五年。齊景公卒。六年。齊田乞弒其君孺子。……(哀公)十年。伐齊南邊。十一年。齊伐魯。季氏用冉有有功。思孔子。孔子自衛歸魯。十四年。齊田常弒其君簡公於徐州。孔子請伐之。哀公不聽。十五年。使子服景伯・子貢爲介適齊。齊歸我侵地。田常初相。欲親諸侯。十六年。孔子卒。

魯国では、孔子に関連する事件は自国の記述であり、周の事件は魯に関連するとみなすことができる。しかしここでも秦の記述は、直接的に魯国と関連するものではない。それにもかかわらず他国の記事が記されているのは、これらの事件が西周から春秋時代にかけて、共通する大事と認識されたからではなからうか。こうした他国の事件は、『史記』世家に共通してみられる。

いま『史記』本紀、世家と十二諸侯年表から、西周と春秋時代の他国の事件で、とくに共通する叙述を表に一覧してみると、父の司馬談が時代の画期とした事件とほぼ一致するという特徴がある。

たとえば司馬談の歴史観では、周の礼儀が整うのは、成王のとき周公旦が補佐したためであるが、このとき司馬氏

表5 西周、春秋時代の事件

歴史の大事	周	秦	呉	齊	魯	燕	蔡	曹	陳	衛	宋	晋	楚	越	鄭	趙	魏	韓	田
1 周厲王の出奔	○△			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		△				
2 共和の時代	○-			○	○	○	○	-	-	○	-	○	-		-				
3 周宣王の即位	○	○		○	○	○	○	△	○	○	○	○	○		△	△			
4 犬戎が周幽王を殺す	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	△			
5 秦が諸侯となる	-	○		○	○	○	○	○	○	-	○	○	○		-				
6 呉王闔廬が楚を伐つ	-	○	○	○	-	○	○	-	○	-	-	-	○	-	-	-			-
7 孔子が魯の相となる	-	○	○	○	○	-	△	-	△	△	△	○	○	-	△	△	○		-
8 齊田常が簡公を弑す	○	○	○	○	○	○	○		○	-	○	○	-	-	○	-	-		○
9 孔子の死	○	○	-	-	○	○	-		○	○	-	○	-	-	○	-	-		-
10 越が呉を滅ぼす	-	-	○	○	○	-	-			-	-	-	○	○	-	○	-		-
11 三晋が諸侯となる	○	○	-	○	○	○				△	-	○	○	-	○	○	○	○	△

○記事あり、△関連、-記述なし、〔田〕は田敬仲完世家

表6 十二諸侯年表の事件

歴史の大事	周	魯	齊	晋	秦	楚	宋	衛	陳	蔡	曹	鄭	燕	呉
2 共和元年 (前 841)	○													
3 宣王の即位 (前 828)	○													
4 周幽王の死 (前 771)	○												○	
5 秦が諸侯となる					○									
周の東遷 (前 770)	○													
6 呉王闔廬が楚を伐つ 秦の救援 (前 506)	△			△	○	○				○				○
7 孔子が魯相 (前 500)		○												
8 齊簡公の死 (前 481)			○											
9 孔子の死 (前 479)		○												

○記事あり、△関連

は「周の太史」であった。しかしその後、周の衰退と混乱があり、王道が廃れ礼楽が衰え、それは厲王の出奔と、共和の時代、宣王の即位、周幽王が犬戎に殺されるという事件に代表される。そして衰えた周の制度は、周公旦の卒から約五〇年後に、孔子が「六芸」の編纂と礼儀の復興をする。しかし戦国時代になると、ふたたび史文の散佚が起こるといふものであった。いま西周と春秋時代の事件をみると、ほとんど父の転換期とした事件と重なっている。そして孔子が魯の相となる記事と、孔子の死を共通して記すことも、この延長とみなすことができよう。

わずかに違うのは、秦が諸侯になる事件と、呉王闔廬が楚を伐つ事件、斉の田常が簡公を弑す事件、越が呉を滅ぼす事件、三晋が諸侯となる事件などである。これらは直接的に司馬談が述べている転換期ではないが、春秋秦の封建は秦本紀と同じく後に王者となる位置づけであり、斉と三晋で君主の位が奪われるのは、戦国時代の始まりを示す事例となるであろう。また呉王闔廬が楚を伐つ事件は、当時は複数の諸国にかかわる大事であり、これを示すのが十二諸侯年表の各国にみえる記載である。

こうした諸国の大事は、また司馬遷の歴史観とも共通している。司馬遷は、歴史のはじまりを黄帝から顓頊、帝嚳、堯、舜とする点で父と異なっていたが、自序の列伝第七十の説明では、漢王朝が五帝から夏・殷・周の三代へと継承されることは共通している。また後の転換期として、①周の王道が廃れたこと、②史文が散佚すると認識している。

維我漢繼五帝末流。接三代絶業。周道廢。秦撥去古文。焚滅詩書。故明堂石室金匱玉版圖籍散亂。……百年之間。天下遺文古事靡不畢集太史公。太史公仍父子相續纂其職。

したがって『史記』春秋戦国世家の構成からみれば、歴史の転換期となる大事の位置づけは、父と共通していることがわかる。しかしこうした歴史観と時代の転換期は、必ずしも「李陵の禍」による発憤を想定する必要はない。むしろ逆にいえば、発憤による著述を強調する説では、なぜ『史記』本紀、表、世家の構造に、このような歴史観がみ

られるのかを説明することはできないであろう。ここから私は、天と地の事件を説明し、興亡と盛衰の原理を明らかにしようとする「太史公」としての歴史観が『史記』の構造と深くかかっていると推測するのである。そして父の談と、司馬遷の歴史観が微妙に異なるのは、二人が終点としようとする社会背景の違いが影響していたが、『史記』の歴史叙述の主体部分は父の構想にふくまれるものであったと考える。

おわりに

『史記』には複数の歴史観が示されていた。その一は、父と司馬遷の歴史観であり、これは『史記』叙述の始まりと終りを示唆している。二は、本紀と世家の歴史観であり、その具体的な記述は堯、舜、禹から多くなり、とくに周王朝より以降を主体としている。三は、十二諸侯年表にみえる「共和元年」を始まりとする時代区分である。こうした違いは『史記』の構造にかかわるものであり、その要点は以下のとおりである。

司馬談は、元封元年の遺言で舜、禹（夏王朝）を意識しながら、とくに漢の武帝が周から約一〇〇〇年の封禪を継承する側面を重んじていた。それは周の太史であった先祖の職務を受け継ぐという意識と重なっている。また先人（父）の言葉として紹介された歴史観をあわせると、さらにいくつかの転換期を想定し、その最終は孔子にならった天の瑞祥と「獲麟」か、あるいは来るべき封禪の儀式を画期とするものであったらしい。これは司馬談が道家を学んだといわれながら、『尚書』にみえる堯、舜より以降の儒家の歴史観と共通しており、かれの死までの社会的な影響をみることできよう。

しかし『史記』にみえる司馬遷の歴史観は、当時の風潮や自分の旅行体験をふまえて五帝（黄帝、顓頊、帝嚳、帝

堯、帝舜」と禹の事績を意識し、三代（夏、殷、周）と秦などの先祖につながる黄帝を始まりとしている。また叙述の最終年代についても、太初曆の改定と一連の制度改革をおこなった「太初年間」までとした。これは父の歴史観をこえて、堯と舜より以前の歴史を追加し、最終では元封元年の封禪から太初年間まで延長したことになる。

ここにみえる二つの歴史観は、二人が太史令として経験した武帝期の祭祀儀礼や制度改革と大きくかかわっている。したがって『史記』の叙述は、司馬談と遷の父子が直面した時代の影響をうけていることが再確認できよう。

ところが『史記』の構造は、こうした司馬遷の歴史観を十分には反映していない。『史記』が通史とされるのは、黄帝に始まる古代史を叙述するためであるが、五帝の時代は巻一「五帝本紀」と三代世表で簡単に述べ、八書の一部で追加しているにすぎない。しかもその出典は、司馬遷がみずから述べるように、儒家の經典の範圍をこえた「六経の異伝」「百家の雑語」や「五帝徳」「帝繫姓」などによるものである。そして『史記』夏本紀・殷本紀につづく周本紀と春秋戦国世家は、始祖に関連して五帝以来の伝えをふくむが、叙述の主体は周王室の建国にかかわる時代からとまっている。ここから『史記』の世界は、本紀と世家をみるかぎり、司馬談が述べるように堯、舜と、禹にはじまる夏、殷（商）時代と、周王室の始まりを主体として、その前史に司馬遷が、少量であるが重要な歴史評価を加えたことがわかる。したがって通史は本紀と表、書の部門であり、紀伝体は周本紀より以降と、ほぼ世家と列伝の部門にあっている。

『史記』周本紀より後の歴史は、制度が整えられたり混乱するという二人に共通する歴史観にそって叙述されている。ここでは周厲王と幽王期の混乱と、周の東遷、秦國の始封、孔子の事績、三晋の封建などが注目されていた。しかし三代世表には、周厲王までの世系だけで年代を記さず、その序文で「曆譜課」などの年数が信頼できないとされている。また十二諸侯年表では、厲王の出走のあと「共和元年」から年代を開始している。しかも年表の配列は、春

秋世家がほぼ周から封建された順序であるのとはちがって、周と魯との関係の強弱や、地理的な距離の遠近に対応している。ここから十二諸侯年表の起点は、司馬遷が利用し復元した暦法の年代にもとづくものと推測される。

このように『史記』にみえる複数の歴史観は、父と司馬遷の歴史観を反映しながら、司馬遷が利用した先行資料の制約による歴史となっていた。それは『史記』戦国史の部分においても、ほぼ同じような構造となっている。

以上のような歴史観から、あらためて『史記』の構造をみると、司馬遷は「李陵の禍」よりも前にその主体的な部分を構想できたとおもわれる。その構想は、武帝の時代に儀礼や制度を改革するにあたって、古からの天命の移動と、諸国の興亡と盛衰を論評しようとする太史令の自負から生まれたものと考ええる。そのとき司馬遷は、それを説明する具体的な手法として、思想だけで論評するのではなく、先行資料を取捨選択し配列することによって、『史記』の古代本紀や表、書、世家などの作成をめざしたことになる。したがって李陵の禍による発憤を重視して、そのあと著述した部分を強調する説では、こうした『史記』の歴史観と叙述との関係をうまく説明できないのである。ただし李陵の禍のあと、『史記』の編集に与えた影響と補足した部分については、さらに検討が必要である。

本稿では、複数の歴史観から『史記』の一特徴を示すにとどまっているが、今後は紀伝体としての本紀と世家、列伝の叙述をふくめて、その全体的な構造と思想を考えてみたいとおもう。

注

(1) 通史と紀伝体の形式については、劉知幾『史通』六家篇、二体篇(増井経夫訳『史通』一九六六、研文出版、一九八一)、稲葉一郎『中国の歴史思想―紀伝体考』(創文社、一九九九)など参照。

(2) 拙著『史記戦国史料の研究』序章、第一章『史記』と中国出土書籍(東京大学出版会、一九九七)と拙稿「簡牘・帛書の

発見と『史記』研究」(『愛媛大学法文学部論集』人文学科編二二、二〇〇二)で、出土資料と比較する研究方法について述べている。

(3) この問題は、伊藤徳男「麟止と獲麟」(『歴史』二九、一九六五)、張大可「史記断限考略」(『史記研究』甘肅人民出版社、一九八五)などで諸説が整理され、とくに最終の年が焦点となっている。

(4) 拙稿「司馬談・司馬遷と《太史公書》の成立」(『愛媛大学法文学部論集』人文学科編六、一九九九)。

(5) この部分は『国語』楚語下にもとづく指摘されている。

(6) 太史公自序に、

太史公仍父子相續纂其職。曰。於戲。余維先人嘗掌斯事。顯於唐虞。至于周。復興之。故司馬氏世主天官。至於余乎。

欽念哉。欽念哉。

(7) 『史記』十二諸侯年表などの紀年は、平勢隆郎『新編史記東周年表』(東京大学出版会、一九五五)で修正が試みられている。

(8) また『史記』封禅書には、黄帝に至る多くの祭祀を記載することが注意される。

周公既相成王。郊祀后稷以配天。宗祀文王於明堂以配上帝。自禹興而修社祀。后稷稼穡。故有稷祠。郊社所從來尚矣。……自周克殷后十四世。世益衰。禮樂廢。諸侯恣行。而幽王爲犬戎所敗。周東徙雒邑。秦襄公攻戎救周。始列爲諸侯。秦襄公既侯。居西垂。自以爲主少皞之神。作西時。祠白帝。其牲用騶駒黃牛羝羊各一云。其后十六年。秦文公東獵汧渭之間。卜居之而吉。文公夢黃蛇自天下屬地。其口止於鄜衍。文公問史敦。敦曰。此上帝之徵。君其祠之。於是作鄜時。用三牲郊祭白帝焉。……其后百餘年。秦靈公作吳陽上時。祭黃帝。作下時。祭炎帝。

(9) 封禅書では、斉人の公孫卿の言に、宝鼎を得た年の冬辛巳朔旦が冬至となるのは黄帝のときと同じと言い、封禅をした黄帝の伝えや、五山(五岳)の巡狩などを記している。

(10) 封禅書には、武帝が公孫卿の言を聞き終えたあと、つぎのように記している。

於是天子曰。嗟乎。吾誠得如黃帝。吾視去妻子如脫屣耳。乃拜卿爲郎。東使候神於太室。

(11) 『史記』五帝本紀に、

自黃帝至舜・禹。皆同姓而異其國號。以章明德。故黃帝爲有熊。帝顓頊爲高陽。帝嚳爲高辛。帝堯爲陶唐。帝舜爲有虞。帝禹爲夏后而別氏。姓姒氏。契爲商。姓子氏。棄爲周。姓姬氏。

司馬遷が六芸（詩、書、礼、楽、易、春秋の六経）に信頼をおき、文辞の雅訓を求めたことは岡崎文夫「支那史学思想の発達」（岩波講座『東洋思潮』四、一九三四）、同『司馬遷』（弘文堂、一九五八）で説明され、平岡武夫「五帝本紀の新研究」

（『支那学』八一、一九三六）は、司馬遷が民族の始祖となる系譜を尊重し、統一国家への関心があることを指摘している。

(12) 『史記』本紀の特徴は、佐藤武敏『司馬遷の研究』附篇第三章『史記』の内容上の特色」（汲古書院、一九九七）で説明されている。

(13) 拙稿『史記』戦国系譜と『世本』（前掲『史記戦国史料の研究』）参照。このほか中島敏夫編『中国神話人物資料集』三皇五帝夏禹先秦秦資料集成』愛知大学文学会叢書VI（汲古書院、二〇〇一）で諸資料との関連がわかる。

(14) 『史記』五帝本紀では、以下の巡狩の記事などが追加されている。

東至于海。登丸山。及岱宗。西至于空桐。登雞頭。南至于江。登熊・湘。北逐葷粥。合符釜山。而邑于涿鹿之阿。遷徙往來無常處。以師兵爲營衛。官名皆以雲命。爲雲師。置左右大監。監于萬國。萬國和。而鬼神山川封禪與爲多焉。獲寶鼎。迎日推策。舉風后・力牧・常先・大鴻以治民。順天地之紀。幽明之占。死生之說。存亡之難。時播百穀草木。淳化鳥獸蟲蛾。旁羅日月星辰水波土石金玉。勞勩心力耳目。節用水火材物。有土德之瑞。故號黃帝。

(15) この点は、平岡前掲「五帝本紀の新研究」、大島利一「司馬遷と『史記』の成立」（清水書院、一九八四）でも説明している。

(16) こうした歴史観から『史記』八書の構成をみると、つぎのような特徴がある。もし父が、漢武帝による礼儀制度の復活を、天の瑞祥と封禪に見いだしたとすれば、それは失われたという礼書と楽書のほか、封禪書に対応している。また河渠書は、禹の治水に始まり、これも堯・舜より以降の時代である。拙稿『史記』河渠書と『漢書』溝洫志（『中国水利史研究』三〇、二〇〇二）参照。また司馬遷が、天の瑞祥と封禪に加えて、太初改曆、制度の改革を画期として、最終の区分を太初年間にし

たとすれば、佚文といわれる律書や、先にみた曆書のほか、天官書の区分にも対応している。このほか平準書は、高辛氏（帝嚳）以前は不明として、舜、禹より以降の年代を示している。これらの構造については、今後とも検討が必要である。

(17) 『史記』五帝本紀は、『大戴礼』五帝徳、帝繫篇とよく似た構文でありながら、「黄帝崩。葬橋山」という記事を追加している。

(18) 歴代の注釈では文献との字句異同を考証しているが、龍川龜太郎『史記会注考証』は各部分の出典を細かく注記している。

(19) 池田四郎次郎氏は、龍川龜太郎氏への私信で「古人が世家ハ始于太伯、列傳始于伯夷ヲ言フ人ハ多キモ、本紀始于堯舜、八書始于禮、年表始于三代ヲ言ハザルハ、未ダ尽サズト存候。史記ハ黄帝ニ始ルニ非ズ、陶唐（堯）ニ始ルト存候」と述べている（拙稿「明治以降の『史記』研究」（『愛媛大学法文学部論集』人文学科編一、二〇〇一）。これは『史記補注（上）』（明徳出版社、一九七二）巻一の末尾によると、自序の「述陶唐以來。至于麟止」を根拠としているが、『史記』の歴史叙述からみれば一理あることになる。

(20) 伊藤徳男『史記十表に見る司馬遷の歴史観』（平河出版社、一九九四）は、封建制の視点から十表全体の構想を考察している。

(21) 『夏商周断代工程一九九六—二〇〇〇年階段成果報告・簡本』（世界図書出版公司、二〇〇一）では、共和元年（前八四一）を起点として、夏王朝まで遡る年表を復元している。

(22) この点は、佐藤前掲『『史記』の内容上の特色』（『司馬遷の研究』）で説明されている。

(23) 『発憤著書』説では、天命や人間の運命観などに注目しているが、通史として『史記』の歴史観がどのように現れているかは別の問題となろう。

(24) 拙著前掲『史記戦国史料の研究』。

(25) 佐藤武敏『『史記』の編纂過程』（前掲『司馬遷の研究』）では、司馬談が作成した篇のほか、司馬遷の編纂を、李陵の禍の前後に分けて考察している。『史記』の構造では、全体的な歴史観とともに、こうした内容の追加した部分があることを想定しつつ、さらに検討が必要と考えている。